

2018 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	伊藤 恵美子
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程修了	博士 (学術)	日本語教育学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

受講生一人ひとりが受講開始時より確実に学力が向上し、人間的にも成長して校訓「真面目」が実行でき、「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」になるよう指導する。

(計画)

教職員の心構え「子弟を教育するは、私事に非ず。天に事うるの職分なり」を常に念頭に置き、受講生のレディネスを調査して、本学の学生に合致する教授法を検討・実施する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）日本語表現Ⅰ、日本語C、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ

（後期）日本語表現Ⅱ、異文化コミュニケーション、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ

○教育方法の実践

・「日本語C」

ネパール人留学生2年生の再履修クラスであった。1年次に資格外活動（アルバイト）をやりすぎないようにと過去の事例を話したが、アルバイト収入と消費生活に次第に関心が向いていき、複数の職場を掛け持つようになった。その結果、復習時間がなくなり、毎回の小テストも定期試験も低迷した。学生が初心（入学当初の勉強姿勢）に帰るのを待ちたい。

・「異文化コミュニケーション」

木曜日、金曜日と連続して同じ内容の授業を行った。木曜日クラスは授業に前向きな学生が多く、クラスワークは活発であった。他方、金曜日クラスの数人の学生は毎週のように授業中に教室を出たり入ったりしていた。後期開講科目なので季節がら風邪・インフルエンザ等で体調を崩す学生もいたため（一人ひとりに確認していたら授業を何度も中断しなければならないので）自由にさせていたが、彼らは他の授業でも同じような態度であると聞いている。真面目な（通常の授業態度の）学生に与える影響の大きさを考えて、次年度の授業運営に備えたい。

・「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」

講義形式ではなく、アクティブ・ラーニングで授業を進めた。最終授業で学生に行った振り返りのアンケートには「自分で調べて内容を発表するので、とても頭に残りました」「自主的に学習する機会・時間が増え、より効果的な内容になると感じた」「先生が一方向的に教えて下さるより、頭をはたらかせたと思う。自分で疑問を探しながら学ぶことの大切さに気づけた」等、非常に好意的な感想ばかりであった。また「今までやってきたアクティブ・ラーニングに比べて楽しかったです」のような高い評価も散見された。専門外で、初めて担当した科目なので授業準備に細心の注意を払ったが、授業は成功裏に終わり、目標は達成できた。

・「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」

一般的に基礎演習は中等教育から高等教育への橋渡しに位置付けられるので、2017年度に準じ

て、前期は基本的な文書の作成とメール連絡ができるようになること、オフィスアワーを活用できるようになること、教員に質問ができるようになることが身に付くようにした。各学生は受講科目の教員をオフィスアワーに訪問して往時の大学生活や勉強方法等をインタビューし、大学祭でポスターにまとめて発表した。基礎演習発表大会では、大学での1年間の学びを振り返って印象に残っている科目の概要をプレゼンテーションした。いずれの発表もグループワークとしたので、準備の過程でリーダーシップを取り方も自然に身に付けられた。

・「総合演習Ⅰ・Ⅱ」

卒業研究に向けた前段階として、視野を広げて現代社会（日本だけでなく国際社会）に関する知識を豊かにし、その背景も理解できることを目的にした。受講生は新聞を読んで「私が選んだ今週のニュース」としてクラスでプレゼンテーションを行い、学期末にはレポートにまとめた。身の回りのことから世界のニュースに目を向けはじめた学生もいれば、自分の周囲に関心がとどまっている学生もいる。それぞれのテンポで、それぞれの学生の成長につながっているのだろう。

○作成した教科書・教材

なし

○自己評価

2018年度教育活動の自己評価としては、初めて担当した「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」を挙げたい。この科目は国語教育（日本人に母語の日本語を教える分野）のテリトリーであり、これまで本学でも国語が専門の教員が担当していた。選択科目の1時限配置であったが、殆どの受講生の意欲は高く、アクティブ・ラーニングに正面から取り組み、授業中の小テストでは毎回満点を目指して自習を続け、課題も期限内に提出してくれた。全学共通科目なので三学部の学生が受講しており、相互に他学部の学生の考え・発想に新鮮な思いを持ってグループワークに積極的になれたようである。教育学部の特に優秀な学生たちがクラスを上手くリードしてくれ、学生の満足度は高くなり、教育効果も上がり、延いては良い授業、楽しい授業になった。教育者として、第二言語教育から母語話者教育へと射程を広げることができた。

Ⅱ 研究活動

○研究課題

- (1) 応用言語学の課題「第二言語教育のコミュニケーション能力の育成」（究極課題）
- (2) 大学教育の課題「アカデミックスキルの養成」（継続課題）
- (3) 新課題「第二言語習得と母語習得」

○目標・計画

（目標）

周辺分野の最新の研究動向を把握して、研究課題に挑む。

（計画）

- (1) 母語とアイデンティティの関係を分析する。
- (2) アカデミック・ライティングについて実践を行う。
- (3) 言語習得の射程を広げて考察する。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（学術論文）

- ・伊藤恵美子「台湾人」という意識：若者のアイデンティティはどこから来たのか？どこへ行くのか？」愛知東邦大学『東邦学誌』、第45巻第1号、2016年6月、79-89頁

- ・伊藤恵美子「外国人留学生の日本語学習の歩み：入学後2年間を中心に」愛知東邦大学『東邦学誌』、第44巻第1号、2015年6月、43-62頁
- ・伊藤恵美子「異文化トレーニングを体験した学生の変容：振り返りから認識した異文化コミュニケーション」愛知東邦大学『東邦学誌』、第42巻第2号、2013年12月、1-14頁
- ・伊藤恵美子「日本語習得における中等教育と高等教育の連携効果：ユウキ・ナツミとサキ・イケの表現力から」愛知東邦大学『東邦学誌』、第41巻第2号、2012年12月、101-114頁
- ・伊藤恵美子「ポライトネス・ストラテジーに反映された社会文化的規範：タイ語・ジャワ語・日本語の断らない表現に焦点を当てて」名古屋大学大学院国際開発研究科『国際開発研究フォーラム』、第41号、2012年3月、1-14頁（査読付）
- ・伊藤恵美子「台湾国立高雄餐旅大学応用日本語学科における日本語教育：国家政策による観光産業の人材育成」下関市立大学学会『下関市立大学論集』、第55巻第1号、2011年7月、107-114頁

（学会発表）

- ・（国際学会）伊藤恵美子「台湾人の意識：若者のアイデンティティはどこから来たのか？どこへ行くのか？」ICJLE2014 日本語教育国際研究大会（University of Technology, Sydney）2014年7月11日（審査付）

（その他）

- ・伊藤恵美子「コミュニケーション能力の萌芽：言語習得を幼児の母語習得の側面から」愛知東邦大学『東邦学誌』、第46巻第2号、2017年12月、169-176頁

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・伊藤恵美子〔研究代表者〕平成20～22年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））「東南アジアの言語のポライトネス：タイ語の場合」（課題番号：20520475）採択
- ・伊藤恵美子〔研究代表者〕平成23～25年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））「アジアの言語のポライトネス：台湾人について」（課題番号：23520641）採択

○所属学会

日本語教育学会会員、社会言語科学会会員、留学生教育学会会員、日本コミュニケーション学会会員

○自己評価

研究課題（2）大学教育の課題「アカデミックスキルの養成」に関して、2018年度に新しく担当した科目「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」でアカデミック・ライティングの実践を行った。今後、学生が提出したアンケートを分析し論文にまとめていく。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

入試問題作成委員会委員長として職責を果たす。

（計画）

本学着任時から入学試験問題を作成してきたが、今年度はそのまとめ役なので気を引き締めて行いたい。

○学内委員等

入試問題作成委員長

○自己評価

委員を経ずにいきなりの委員長だったので、前年度の業務内容をまずは理解して踏襲していった。一般入試Ⅰ期でページ区切りによる印刷ミスのため試験時間延長の措置を取ったが、Ⅱ期以降の入学試験は支障なく終わることができた。今年度の経験を教訓とし、来年度の業務に臨みたい。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

大学教員として科学的研究を進め、研究成果を広く社会に還元する。(継続目標)

(計画)

所属学会の論文査読等を通して後進の育成に力を尽くし、学術の発展に貢献する。(継続計画)

○学会活動等

- ・日本語教育学会：学会誌『日本語教育』学会誌委員（主査）、審査運営協力員
- ・社会言語科学会：学会誌『社会言語科学』査読協力者
- ・留学生教育学会：学会誌『留学生教育』査読協力者
- ・第二言語習得研究会：学会誌『第二言語としての日本語の習得研究』査読委員
- ・国際学会 Sydney -ICJLE2014：発表論文査読協力者
- ・国際学会 Bali-ICJLE2016：発表論文査読協力者
- ・国際学会 Venezia -ICJLE2018：発表論文査読協力者

○地域連携・社会貢献等

地域連携には該当せず

○自己評価

日本語教育学会学会誌『日本語教育』の査読に 2009 年から携わり、2013 年に学会誌委員会委員の主査（世界でわずか 30 人）に就任し、世界中から投稿される論文の査読を行っている。2018 年度は『日本語教育』への投稿論文の査読を 1 本行った。今後の学術の発展、及び日本語教育学の研究促進を世界最高レベルで担っており、大学教員として社会貢献を十分に果たしてきた。学会活動は、広告のような商業ベースと異なり、高等教育機関としてあるべき本来のアカデミックな側面において本学の知名度向上に貢献するものなので、高く評価できよう。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

特になし

VI 総括

大学教員としての活動の四分野において、目標に向けて具体的な計画が達成できた。特に、大学運営に関して、入試問題作成委員会の新体制構築に向けて休日返上で全力で取り組んでいる。学部 FD で学生会から出された項目が配布され、「書く機会をもっと増やしてほしい」「実技を除いて 15 回目に試験を行わない」「持ち込み可の試験を禁止すべき」等とあった。「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」「異文化コミュニケーション」ではすでに実行していることであるが、学生からの支持を得ていることが分かったので、今後も学生の成長につながるよう続けていきたい。

以 上